

満州から苦勞して生きて帰った者は、その苦勞をはね飛ばすように頑張った。

皆が、一応それぞれ落ち着いてくると、父のことが思い起こされる。あれほど国策にぴったりの雄志を抱いて、その精神を鮮やかに実現し、子供たちの未来も万全という自信を持っていたのに、そうならなかったのは、国と軍部の誤算に責任があったと思っ

あまりにも無残な結果に、父は、「こんなことではあきらめ切れない。何とかしてもう一度やり直したい」と、避難の最中にも言っていたと聞いたが、私も同感であった。

あの広い豊かな天地にわたしたちの可能性は無限にあったのだ。現地人と対等に誠実に協和して、日本にはないすばらしい純朴な文化と生活ができたはずだったのに、それができなかつたのが残念だった。

父は、家族を生かすために、男の責任で命を使い果たしてしまつたのだ。母の生涯も実にそうであった。今私が、植木屋庭師をやりながら考えるのは、これは自然を相手の満州生活の延長だということだ。そして、

あのようなどい目に遭つても、満州に行ったことを後悔はしていない。

大陸の地と、現地人に会つたことはよい体験で、真実の日久友好であつたのだ。

父も母も、同じ思いであろう。父よ、かわいい妹たちよ、どうぞ大陸の地で生まれ変わつてほしい。

私の永住帰国までの血涙の労苦

福島県 三瓶 マツエ

一 希望に燃えて満州へ

私は、昭和十四年四月、二十三歳のときに、福島の本宮町出身の渡辺敏美と結婚し、郡山市に新居を構え平凡な生活を始めました。

夫は、当時日本化学株式会社に勤務し、朝早く出掛け、夕方遅くまでまじめに働いていましたが、次々と子供が生まれ、昭和十九年には三人の子供がいて、生活は大変でした。戦争は段々と激しくなり、物は不足

してきました。衣料も配給制度となり、子供たちに着せるものにも困ってきました。そのうえに、食べるものも不自由となり、この福島の田舎でも、米や麦などはなかなか思うように手に入らなくなり、毎日の夫の弁当や子供の食事にも苦労するようになりました。

このままでは、子供も満足に育てることができないと思い、ずいぶんと悩みました。そんなときに、夫の妹夫婦が満州の開拓団に行くこととなり、一緒に行かないかという誘いがありました。日本で暮らしているも何もよいこともないと思い、みんなと相談して、義妹夫婦と一緒に満州に行く決心をしました。戦争の方も次第に敗戦色が濃くなっていましたが、それでも負けるなどということは夢にも思わず、むしろ満州に行つた方が安全だろうという気持ちの方が強かったと思います。

昭和十九年四月に、私たち夫婦・子供の五人と義妹夫婦の総勢七人で、朝鮮を経由して黒龍江省佳木斯ジャムスの近くにある郡山河南開拓団に向かって福島を出発しました。

生まれて初めての長い旅で、心身ともに疲れ果ててしまい、やっと五月十一日に開拓団本部に到着しました。開拓団の人々は、みんな親切で温かく迎えてくださり、今までの緊張も解けてほっとしました。

数日後、私たちのための歓迎会を団本部でしてもらいました。しかし運命のいたずらでしょうか、その席上に思いもかけないことが起きました。それは召集令状が夫にきたのです。まったく考えてもいないことでした。即時入隊ということで、慌ただしく準備をして、すぐに出発してしまいました。それが夫との最後の別れでした。どこの部隊に入り、どこに行ったのか分からずじまいでした。

夫が出発したあと、当分は呆然として、三人の子供を抱えて涙にくれる毎日でした。周囲の人は、いろいろと親切に慰めてくれましたが、どうしてよいか途方に暮れる毎日でした。

このまま郡山に帰ることもならず、何とか気を取り直して、開拓団でみんなと一緒に働かなければと決心しました。しかし私は、農家出身ではなく、農

作業などは全然知りませんでした。開拓地の地原団長さんや、団員の人々に助けられ、教えられながら、なんとか開拓作業をするようになりました。子供も家の事情を子供ながらによく分かっていたのか、おとなしく、ききわけよく過ごしていました。

子供三人と共に、約一年間汗にまみれ、泥にまみれて一生懸命に働きました。畑に行くときには、上の二人は一緒に連れて行きましたが、下の子供は連れていくわけにもいかず、よその家に預けるか、それができないときには、家の窓際にひもで縛って出かけました。そんなときには下の子供は「アーチャン、アーチャン」と泣き叫びました。後ろ髪をひかれる思いで野良に出かけましたが、仕事を終えて家に帰ってみると、子供は泣き疲れて眠っていました。そんな子を抱きしめて、私も泣いたことが思い出されます。

二 終戦からの悲劇・逃避行

昭和二十年八月、思いもよらずソ連軍が、満国境から突然に侵入してきました。その話が伝わるや、開拓団の人々はびっくりし、一体これからどうなるの

か、私たちはどうすればよいのか、などと騒ぎ始めましたが、どうすることもできませんでした。団本部からも何も指示がありませんでした。私も夫はどこでどうしているのかと心配になりましたが、それもどうにもなりません。しばらくは野良仕事も手につかず、ただおろおろするばかりで日を過ごしていました。

八月十五日、とうとう終戦になりましたが、私たちはすぐには分からず二、三日してからその話が伝わってきました。

開拓団長は、団員を集めて「日本は負けたのだ。団はこれから少しでも安全な所に避難するので、明朝までに準備をして団本部前に集まるように」との話がありました。

とうとう心配していたことが、現実のこととなってきたのです。開拓団の中は騒然ときました。そのときに、なんでこんな所に来てしまったのかという悔いが頭をよぎりました。

私はすぐに家に帰り、準備をしましたが、三人の子供連れでは、荷物などは、何一つ持つことはできませ

ん。子供は当時、五歳の男の子、四歳と一歳の女の子でしたので、子供たちに荷物を持たせることはほとんど期待できませんでした。ほんの少しの着替えは私が持って、それこそ着の身着のままの有り様で、団本部の前に集まりました。開拓団の人々も自分たちの家族のことで手一杯で、私たちを助けることもできない様子でした。義妹の夫婦も、声はかけてもらいましたがやはり自分たちの荷物でいっぱい、手伝ってもらうこともできませんでした。

とりあえず、三江省方正県に向かっての逃避行が始まり、昼も夜も歩き続けました。病人や年寄りもいましたが、一緒に歩くほかありませんでした。痛々しい姿で、何とも言えない気持ちになりました。ときどき声をかけて励ましましたが、段々と声をかけることも少なくなっていきました。ただ、黙々と歩くばかりです。

そのうちに、自然と列が長くなり、間があくようになり、団の幹部の人が「危険だから間があかないように、前の人について歩くように」と声をかけていまし

たが、どうしても列は開くばかりでした。所々の、畑の中や丘の上に満人が手に鍬や棍棒を持って、数人ずつでたむろしているのが見受けられ、急いで前の人に追いつくようにしたことも度々ありました。

雨が降れば、一枚だけ持っていたねんねこを三人の子供の頭にかぶせて傘がわりとし、私はずぶぬれになって歩きました。

夜は、どこでも構わずに野宿をしましたが、近くで狐の鳴き声があることもあり、生きた心地もしませんでした。

避難の途中でやかんを拾い、わずかな流れをみつけると、さっそくやかんに水をすくって、子供に与えたりしました。どうしても流れている水がないときには、馬の足跡にできた、くぼみにたまった泥水をすくって飲ませたりしました。子供はのどが渇くと、すぐに水が欲しいと泣き出しますので、水分はほんとうに大事でした。水が無いほど苦しいことはありませんでした。出発のときを持っていた食べ物も段々と少なくなり、みんなと分け合いましたが、歩いている途中の畑にあっ

たとうもろこしや高粱を盗んで生でかじりながら歩くこともありました。私は、子供連れなので体が自由にならず、身軽な人のようにはいかないのです、畑で見つけてもすぐには飛んでいけず、みんなが取ってしまった後に行くので、ほとんど取るものがなくなっていました。親切な人から少し分けてもらいましたが、私は食わずに子供に与えました。そんな日夜を過ごしながら、少しでも早く方正まで行くことに一生懸命でした。

避難しながら歩くときの切なさは、今でも忘れることができません。私は、上の二人の子供を、一人は前を歩かせ、一人は後からついてこさせ、下の女の子を背負って歩いていましたが、前にひかれたり後にひかれたりで、なかなか思うように歩けず、しょっちゅうみんなに遅れてしまい、泣いて歩いたことが度々ありました。

それを見て、団長さんは心配したのか困ったのかは分かりませんが、「だれか、子供のいない人は助けてあげなさい」と言ってくれました。その声でみんなにかわるがわるに助けてもらい、大変に有り難かったで

す。人の親切をしみじみと感じました。「地獄に仏」という例えのとおりのがきがしました。

毎日毎日、あてもなく山を越え、川を渡り、野を横切って、雨の日も風の日も晴れの口も、ただただひたすらに歩き続けました。

子供のいない人などは歩くのが早く、前の方で団長さんたちと「ここはどこだ？」とか「あそこは○○○だ！」などと、歩きながらいろいろと話しているので、状況がなんでもよく分かっているようでしたが、私たち子供連れや、老人たちは歩くのが遅くなり、何百人という行列の後の方なので、ただただ歩くだけで、どこをどう歩いているのか全然分かりませんでした。休憩といわれて、やれやれと子供を背中からおろしておっばいをやろうと思つて、子供をおろしたとたんに出発という声が聞こえて、また背負い直し、おっばいをやることもできませんでした。遅れて歩くと満人たちが待ち構えているので、怖くて怖くて離れては歩けませんので、子供にしわ寄せがいってしまいます。

足の悪い女の人が、一人で歩いていたので、「一緒

に歩きましょう」と誘ったのですが、「私は、歩くのが遅いので後から行くから、かまわずに先に行つて」とのことでしたので、その人をおいて先に進みました。その人は、大きな風呂敷包みを背負っていました。何が入っているのか分かりませんが、みんなと離れて後ろの方を歩いているときに、満人に襲われてその風呂敷包みを取られてしまいました。その包みの中にはお金も入れていたそうで、あとになって、食べ物を買うこともできずに「干しこ（干乾）」になって死んでしまいました。

毎日歩きどおしてましたが、あるとき、とうもろこし畑を通ったとき、満人の農夫の人々がとうもろこしを焼いて、おいしそうに食べていましたが、私はそれを見てどうしても欲しくなり、ついふらふらと列を離れて、その農夫のところに行き、「一本でよいから分けてもらえないか」と言ったら、そのなかにいた年配のおばさんが、「一本あげるから子供に食べさせなさい」と言つて焼きたてのとうもろこしをくれました。お金はとりませんでした。満人のなかにも親切な、心優し

い人もいたのです。

天気の良い日はまだよかったです、雨が降るとほんとうに困りました。ある山の中で野宿をしたときのこと、夜中に雨が降りだし、三人の子供を中にして頭からねんねこをかぶつて雨よけにしてみました、ねんねこがびしょびしょになり雨水がしたり落ちる程でした。雨が上がり朝になったので、また歩き始めましたが、びしょ濡れのねんねこを干すこともできずに、そのまま背負っている一歳の子供の背中にかけて歩きましたが、重いのと、寒いのに苦勞しました。

開拓団の人の中には、我が子を捨てた母親も多かったです。今になって考えれば、こんなにひどいことはありませんが、そのときは致し方のないことで、人々はそれほど深刻には考えていないようでした。私も、子供を捨てようかと幾度となく思ったことがあります。私にはどうしてもできませんでした。病気で死んだのなら、まだあきらめることもできますが、子供を捨てて自分だけ生きても幸福にはなれませんが、それこそ、その後の一生に悔いが残るだけだと思つて、

なんとしても決心がつきませんでした。このことは今になってみて、ほんとうによかったと思っっています。

三 避難所での悲しい生活

やっとの思いで方正県の開拓団の空き地に着きました。九月の上旬ごろだったと思います。

方正開拓団は、既に南下したようだけれどもいませんでした。開拓団の人が住んでいた家に、一応私たちは入ることになりましたが、私は部屋には上がりませんでした。子供が三人もいるので他の人の迷惑になると思い、玄関口の土間の隅に場所をとり、私の足の上の子供三人を抱いて、背中にポロポロになったねんねこをかけて寒さに震えながら一晩過ごしましたが、寒くて寒くて寝付かれませんでした。

次の日からは、馬小屋に移り、馬糞の上にかます吠を敷いて布団代わりにしましたが、乞食でもこんなことはないだろうと思うような生活でした。

しばらくそんな生活をしていましたが、そのうち開拓団の人たちみんな、小屋を建てました。私もその小屋の一つに入ることに、なんとか雨露をしのげ

るようになりましたが、食べることは大変でした。親切な人たちから少しずつ分けてもらいましたが、私は食わずにほとんど子供に与えてしまい、残りを私が食べる有様でした。それでも子供たちはやせるばかりでしたが、どうすることもできずに、母親としてただ悲しむばかりでした。乳も、大分前から出なくなっていました。そのうちに一歳の女の子が、栄養失調でついに死んでしまいました。死んだときの様子は全然思い出せません。ただ、子供たちと小屋の横に穴を掘って埋めたことは覚えています。

残った子供も、次から次と風邪をひきました。そのうちに私も熱を出しましたが、寝ることもできずに働いていました。そして、とうとうこじらせて寝込んでしまいました。寝込んでからも高熱が続く、そのうちに熱にうなされるようになりました。いつかはどうしても日本に帰りたい、いや必ず帰るのだということもいつも思っていましたので、熱にうなされながら幻想のように浮かんで来たのでしょうか、夜になると子供がよく眠っているのに、それを無理に起こして「船が

きたから早く支度をして、船に乗らなければ！早く急いで」などと言って子供をつれて外に出るようなことをしました。その度に、河南開拓団から一緒に避難してきた立花さんに止められました。立花さんにはそのほかにもいろいろ親切にしていただき、心から感謝をしています。このときも立花さんに止めてもらわなければ、今ごろ私は生きてはいなかっただろうと思っています。

もし、私がここで死んだらこの子供たちは、一体どうなるのだろうかと考えると悲しくなり随分と悩みました。その後、この病気は神様に治していただくほかはないという思いにつかれ、夜、寝るとき胸に手を合わせて祈るようになりました。毎晩そのようにしていましたが、寒くて寒くて体の震えが止まらなかったのが、足の方から段々と温かみがでてきて、そのうちに体全体が温まってくるようになりました。そしてホカホカと温かくなり、ぐっすりと眠れるようになりました。まったく不思議なことでした。私がぐっすりと眠っている、周囲の人はみんな、私が死んだのではない

かと思つたそうです。

目が覚めたら熱も段々と下がりはじめ、おなかですいたような気持ちにもなってきました。義妹夫婦が、私のところにきて「具合はどうですか」と聞いたので、「おなかですいたみたい」と言ったら、食べ物を持ってきてくれました。私は何日ぶりかでおなかに食べ物を入れました。それから日一日と快方に向かっています。ほんとうに助かりました。

私がよくになると、今度は四歳の女の子がはしか（麻疹）にかかり、高熱が続いたのち、かわいそうに死んでしまいました。薬など全然なく、なすすべもない看病でした。十一月初めのころでした。ついこの間、一歳の子を栄養失調で亡くし、また四歳の子をはしかで死なせて、悲しみのためしばらくは体も動きませんでした。今ならば、こんなことで子供を死なすことはありえないことです。

四 最後の決心

それからは、お金もなく食べる物も乏しくてどうすることもできないので、団長さんに相談をしましたが、

よい考えもなく、このままでは寒さと飢えで死を待つほかにないと覚悟をしました。

そのうちに周りの同じような状態にある人たちの話から、生きるためには、中国人の家に行くしかない、という考えになってきました。私はどうなってもいいから、残ったたった一人の子供だけは生き延びて欲しいという、切ない願いからでした。

本当に切ないことでした。そのときの私の気持ちは、誰にも理解してもらえないことでしょう。このことを考えるようになってからは、毎晩泣き通してました。

ある満人の世話で、孟という人の家に行くことが決まりました。ある日、使いの中国人が私の小屋にきて、明日馬車で迎えにくるからといって、子供にお金を握らせて、何か買って食べさせるようにと言って帰っていきました。しかし、私はその置いていったお金（はっきり覚えていませんが、確か十元だったと思います）を、今日までいろいろと世話になった立花さんに、感謝の気持ちとして渡しました。立花さんには本当に力になってもらいましたので、なにはさておいても何か

お礼がしたい、という気持ちでいっぱいでした。

そのとき立花さんは、別れがつかかったのか、お金を渡した気持ちが嬉しかったのか分かりませんが、私の手を握って涙をこぼしました。私も一緒になって泣いたことを、今でもはっきりと覚えています。悲しくて寂しい気持ちでいっぱいでした。

翌日に、馬車が迎えにきたので、みんなと別れて避難所を出発しました。

十二月末に、孟慶千と結婚しました。

孟は満州国の軍人でしたが、満州国がなくなってから、こちらに帰って主として農業をしていました。孟は人間的にはとても親切でよい人でした。満軍時代には日本軍と一緒に仕事をしていたので、日本人に対しても好意的で理解をもっていました。

孟には、先妻の子供が一人いましたが、孟は朝早くから外に出て働き、暗くなってから帰ってくるので、日中は三人で生活をしていました。ある日の食事のとき私の子供が「とうもろこしのご飯はいやだ！食べたくない、いらぬ！」と言いました。お米のご飯

が食べたいというのです。私は、すぐに外に連れ出し
て「なんでも食べなさい、お母さんを困らせないで」
と泣きながら叩いたり怒ったりしました。涙が自然に
流れてきました。

孟は、最初のころ私の子供に向かって「お前は、私
の何なんだ」と毎日毎日くり返して問いつめていまし
たが、私の子供は返事をしないので殴られていました。
私はそれを見て、「私のお父さんです、と言いなさい。
そうすればお前もお母さんもよくなるのだから。お父
さんに怒られたら、私たちはどこにも行くところがない
のだから、我慢してお父さんと言ってちょうだい」
と言いつ聞かせました。そのうちに、最初は小さな声で
「満人のお父さんが帰ってきた」と言いだし、孟が家
に入ると「私のお父さんです」と言うようになりまし
た。それで孟も大麥に喜んで、それから孟の子供と
同じようにかわいがられました。

ある日、私が留守にしていたときに、孟の子供が私
の子供に「私の家では日本人の母さんはいらないから
二人でどこかに出て行け」と言ったとかで、私が家に

帰ると子供は泣いていました。ちょうど、孟が用事で、
数日家をあけていたときでしたので、私たち親子は悲
しさがいっぱいですと泣いていました。すると、近
所のおばさんに「どうして泣いているの」と聞かれた
ので、私がおのわけを話したら、「子供の言うことな
ど本気にしないで我慢なさい。ご主人が帰ってきた
ら私から話してあげるから」と慰めてくれました。そ
の後、孟が帰ってきたら、そのおばさんがそのことを
孟に話したそうで、孟の子供はきつく叱られたとのこ
とでした。孟は、自分の子どもに「家の中に女がいな
いということはどんなに困ることか分かるだろう。食
べること、洗濯や針仕事、どんなに困るかよく考えろ」
と言っていたとのことでした。それから孟の子供の態
度も少しよくなってきました。

五 永住帰国への道程

昭和三十五年の春、孟は、満州国軍人のときに日本
軍に協力したということで、一年の刑をうけて投獄さ
れた後、銃殺されました。

私は、そのあとを継いで農業に従事し、それこそ血

のにじむような思いで必死になって働き、細々と暮らしてきました。

孟の死後は、祖国日本に帰りたいという望郷の念が日に日に募り、昼も夜もそのことが頭から離れませんでした。知っている人も次々と日本に帰っていききました。子供とも一時帰国についていろいろと相談をしていました。

ついに昭和五十年に、本籍地の郡山市にいる兄に身元保証人になってもらえましたので、待望久しかった日本の地に、一時帰国をすることになりました。忘れてかけていた日本語も一生懸命に思い出して練習をしました。

私の子供も一緒に帰国することを望んでいましたが、家族の問題もあり、私一人で帰国することとしました。

三十余年ぶりに帰った祖国は、想像もできないほどに発展しており、見るもの聞くものすべてが珍しく、まるで夢の中にいるような気持ちになりました。おとぎばなしの浦島太郎もこんなだったろうと思いました。

懐かしい人々に、私は温かく迎えてもらいました。郡山の町並みも、以前とはまったく異なっていました。山や川は変わっていませんでした。終戦から中国での生活がまるで嘘のように思いました。

ただ一つ悲しいことは、私の夫のことでした。帰国してから知ったことでしたが、夫は、昭和二十二年に復員して、福島の実家に帰ってきたそうです。それから私たちが帰国していないことを知り、八方手を尽くして尋ね続けていたそうですが、どうしてもわからず、これはもう満州で避難中に死んだのだろうということで、四年後に再婚したそうです。これも運命のいたずらということでしょう。そのことを友人から聞かされて、涙するばかりでした。

私も年をとりましたので、また、あの荒涼たる辺地に帰ることがどうしても嫌になり、周りの人の勧めもあって、兄や親類や、県庁・市役所の関係者の方々と相談して、永住帰国に切り替えることになりました。

生き残った子供も、昭和五十二年に私を頼って帰国し、今では平和に暮らしています。

幸いというか、孟との間には子供がいなかったの、中国には今さら思い残すことはありません。ただ、今でもあの異郷の地に眠っている二人の娘、愛子と美津子には、心からすまないとわびる毎日です。

避難中の苦労や、避難所での悲しくかつ苦しかったこと、さらにその後の三十年近くの中国人としての貧しい生活などを思うとき、戦争は私の人生を無惨にも打ち砕いてしまったことを悔やむばかりです。

私の人生―故郷への道は遠かった―

福島県 鈴木 テル

私は、十六歳から五十七歳になるまでの四十数年間を、中国で生活してきました。当時の事を思い出すと、涙が先に出てきます。これは、どのようにして生きてきたかの私の人生記録です。

一 私の生い立ち

私は、茨城県日立市の宮田の在で、大正十五年二月

十六日に生まれました。昭和七年、七歳になって地元の本山尋常小学校に入学し、勉強と家の手伝いをしながら昭和十三年に卒業しましたが、貧乏だったので卒業するとすぐに働きました。

あのころは、卒業前に学校で勤め先を見つけられるようになっていました。

私は、日立製作所に入社しました。このころは交通も非常に不便で、毎朝は五時に起きて、母が作ってくれたお弁当を持って出かけました。きついこともありました。友達も一緒でしたので、毎日が楽しかったものです。

私の父は、日立鉱山の鉱夫でした。毎朝、まだ暗いうちに、カンテラを持って、家族のために働きに出て行く父の後ろ姿を見ました。住宅は鉱山の長屋でした。部屋は六畳二間で、台所がついていました。あまり広くはないのですが、そこに家族七人が住んでいました。子供たちもだんだんと大きくなり、部屋が狭くなってきました。私の兄は、十七歳で海軍に志願し、一年に一度は休暇で帰ってきました。あのころは、ま